

■発行／南方熊楠顕彰会 〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地 TEL0739-26-9909 FAX0739-26-9913
http://www.minakata.org/ 〈E-mail〉 minakata@mb.aikis.or.jp

自筆資料に見る南方熊楠……………④

高野山中の南方熊楠自画像(小畔四郎宛はがき、大正10年11月3日)

文／田村義也(南方熊楠顕彰会理事)

南方熊楠は、大正9(1920)年と大正10(1921)年の二度、植物・菌類調査のため高野山に登りました。

このうち大正9年は、ちょうどこの年真言宗高野山派(金剛峯寺)管長に就任していた旧友土宜法龍との、ロンドン以来の再会の機会でもあり、明治35(1902)年に那智山中で知り合った小畔四郎との、18年ぶりの再会の機会でもありましたが、採集についても多くの収穫がありました。

この年の体験に気をよくした熊楠は、翌大正10年にも、田辺の画家楠本秀男(龍仙)を伴って、再び高野山入ります。

日本郵船の幹部社員として多忙だった小畔は、満州(中国東北部)出張のため、この年は同行出来ませんでした。熊楠は入山三日目の11月3日に、大連滞在中の小畔へ宛てて、自賛の俳句を書き入れた自画像絵ハガキを送ります(図1)。図中の熊楠は、採集したキノコ(古語で「くさびら」)を眼前にならべて、左手に絵筆を握り、右手には酒のつくりをつかんでいます。

書き入れられた句「くさびらは 幾劫へたる 宿対そ」は、この高野山滞在時の句としてよく知られるようになったもので、この時宿泊した高野山一乗院所蔵の楠本龍仙による南方熊楠像(図2、後年龍仙より寄贈されたもの)でも、手にしたキノコを睨み付ける熊楠の頭上に書き入れられています。しかし、両者の肖像を並べてみると、龍仙の描く熊楠が「宿対(因縁のつもる相手)」に向き合って全身に気迫をみなぎらせているのに対し、小畔宛ハガキの熊楠自画像は対照的に、肩の力が抜け、飄々とくつろいだ姿を見せています。

このハガキは、大正15(1926)年に岡書院から刊行された単行本『南方随筆』の口絵に掲載されましたが、その後現物の所在が確認出来なくなっています。

去る平成19(2007)年、小畔四郎令孫の光一氏より、小畔家で保存されていた小畔四郎宛南方書簡スクラップ帳(明治35年から大正10年までの最初期の南方書簡を収録)が南方熊楠顕彰館に寄贈され、これにより小畔宛南方書簡は、現存原資料のすべてが田辺に戻ることとなりました(光一氏からはその後、小畔四郎の生物研究関連文書すべてを一括して当顕彰館にご寄贈いただき、現在順次整理中です)。その内容は、顕彰館所蔵の熊楠宛小畔書簡と組み合わせて、「南方熊楠資料叢書」として昨年度から刊行がはじまっていますが、このスクラップ帳でこのハガキに対応するページには、たいへん残念なことに、ハガキ一葉を貼付した跡と「大正十年十一月三日夜九時」という日付メモ書きが残されているだけで、ハガキの現物は失われていました。

熊楠の高野山行きを記念するとともに、熊楠と小畔の友誼の記念でもある絵ハガキですから、珍重され、なんらかの機会に小畔四郎自身からどなたかに寄贈されてしまったのかもしれない。いつの日か、再び姿を現してくれることを願って止みません。

なお、図2の熊楠肖像軸は、同じく楠本の手になる油絵の熊楠肖像(今年2月、龍仙ご四男の楠本活郎氏より当顕彰館へ寄贈されました)とともに、この3月20日から始まる顕彰館特別企画展「南方熊楠と高野山」において展示されます。また、近刊予定の『南方熊楠・小畔四郎往復書簡(二)』では、写真だけが伝わっているこの南方俳画ハガキと、これへの返事として小畔が大連から送った、植物採集のさなかに断崖絶壁に立って眺望を楽しむ小畔肖像写真とが対で掲載されます。どうぞご期待下さい。



図1 大正10年11月3日付小畔四郎宛熊楠ハガキ(所蔵不明)



図2 楠本龍仙筆 熊楠肖像 (一乗院蔵)

CONTENTS

第19回南方熊楠賞 受賞者決まる	… 2
講演会「熊楠をもっと知ろう!」	
第3回講演会 小峯和明	… 3
第4回講演会 千本英史	…14
第4回特別企画展 オースニング講演	
岩崎 仁	…26
萩原博光	…29
坂東忠司	…31
パネルディスカッション	…34
南方熊楠の湯⑧ 安田忠典	…37
「熊楠」生物覚え書⑧ 土永知子	…40
熊楠ゆかりの地を訪ねる 中瀬喜陽	…41
書評 橋爪博幸	…42
読者より	…43
第6回特別企画展 ごあんない	…44